HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	座談会：北大の教養教育改革と旧高等教育センターの役割
Author(s)	丹保, 憲仁; 佐伯, 浩; 阿部, 和厚 他
Citation	高等教育ジャーナル : 高等教育と生涯学習, 25, 93-111
Issue Date	2018-05
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.25.93
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/70487
Type	departmental bulletin paper
File Information	j25_11_HighEdu.25.93.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/J.HighEdu.25.93
J. Higher Education and Lifelong Learning **25** (2018)
〈Report〉

A Round-Table Talk on Liberal and General Education in Hokkaido University and the Role of the Former Center of Research and Development for Higher Education

Norihito Tambo,[1)] Hiroshi Saeki,[2)] Kazuhiro Abe,[3),4)] Takahiko Nitta,[5)] Teruhisa Machii,[6)] Fumitoshi Demura,[7)] Hiroshi Miura,[8)] Takao Sasaki,[9),10)] Masahito Kurihara,[11)] Tsuneko Mochizuki,[12)] Masaaki Ogasawara,[13),14)]* Atsushi Ando[15)] and Toshiyuki Hosokawa[16)]

1) Former President, Hokkaido University, 2) Former President, Hokkaido University,
3) Professor Emeritus, Health Sciences University of Hokkaido, 4) Professor Emeritus, Hokkaido University,
5) Trustee and Vice-President, Hokkaido University, 6) Professor Emeritus, Hokkaido University,
7) Former Section Manager for Academic Affairs, Hokkaido University, 8) Professor, Hokkaido Information University,
9) Professor, Hokusei Gakuen University, 10) Professor Emeritus, Hokkaido University,
11) Professor, Hokkaido University, 12) Vice-President, Hokkaido University,
13) Professor Emeritus, Hokkaido University, 14) President, Japan Association for College and University Education,
15) Professor Emeritus, Hokkaido University, 16) Professor, Hokkaido University

座談会：北大の教養教育改革と旧高等教育センターの役割

丹保　憲仁[1)]，佐伯　浩[2)]，阿部　和厚[3),4)]，新田　孝彦[5)]，町井　輝久[6)]，
出村　文理[7)]，三浦　洋[8)]，佐々木　隆生[9),10)]，栗原　正仁[11)]，望月　恒子[12)]，
小笠原　正明[13),14)]，安藤　厚[15)]，細川　敏幸[16)]

1) 元北海道大学総長，2) 前北海道大学総長，3) 北海道医療大学名誉教授，4) 北海道大学名誉教授
5) 北海道大学理事・副学長，6) 北海道大学名誉教授，7) 元北海道大学学務部教務課長，
8) 北海道情報大学教授，9) 北星学園大学教授，10) 北海道大学名誉教授，11) 北海道大学教授，
12) 北海道大学副学長，13) 北海道大学名誉教授，14)（一社）大学教育学会会長，
15) 北海道大学名誉教授，16) 北海道大学教授

Abstract ― Celebrating the publication of the book entitled "All about Liberal and General Education of Hokkaido University" (edited by Masaaki Ogasawara, Atsushi Ando and Toshiyuki Hosokawa; published by Toshindo Co., Ltd. in June 2016), a get-together dinner was held on September 1, 2016 at Sapporo Aspen Hotel. Seven authors as well as former presidents of the university and an administrator talked about how the educational reforms were made in the last two decades at Hokkaido University. The discussion also included the perspective of higher education in Japan with special reference to liberal and general education. This article is composed of the recorded round-table conversations.

(Received on 31 January, 2018)

*) E-mail: ogasawara.m@high.hokudai.ac.jp

2016 年 6 月に東信堂から『北大 教養教育のすべて―エクセレンスの共有を目指して』が出版された。A5 判で 262 ページに及ぶこの浩瀚な書物には，1947 年 4 月の北海道帝国大学制度審議会の発足から 2011 年 4 月の高等教育推進機構の発足までの北海道大学の教養教育の全貌が，歴史的経緯を含めてまとめられている。この本の出版を祝うとともに旧高等教育機能開発総合センターを回顧する懇親会が 2016 年 9 月に開催された。この記事はそのとき行われた座談会の記録である。

○会合の名称：『北大　教養教育のすべて―エクセレンスの共有を目指して』（2016 年 6 月，東信堂刊）出版祝賀会ならびに旧北海道大学高等教育機能開発総合センター懇親会
○日時：2016 年 9 月 1 日（木）午後 6 時より
○会場：札幌アスペンホテル　アカシアの間

なお，参加者の所属・役職・称号等は 2016 年 9 月現在のもの。また，記事中の（　）内は編者（小笠原正明，安藤厚，細川敏幸）による注記。年は西暦と（　）内に元号を併記する。

〈座談会〉

細川：本日はよろしくお願いします。参加者はお配りした名簿の通りですが，昨日来の嵐で特急の北斗が止まってしまい，函館にお住まいの猪上徳雄先生は残念ながらご欠席となりました。それでは祝賀会の開宴のご挨拶を阿部先生からお願いします。

阿部：それではこの本の出版を記念して「同窓会」を始めたいと思います。歴史的なことは別にして，この本の中心になっている教養教育の改革については最初から関係しておりまして，みなさんの一人ひとりのお顔をみるととても懐かしい気がします。いろいろなことが浮かんできて，あのときはあんなふうに話しておられたなということまで思い出されます。今日はそういう懐かしい場になりそうで，たいへん嬉しく思います。まず，開宴してからいろいろなお話をおうかがいします。よろしいでしょうか？（「それでお願いします」の声）出版おめでとうございます（「おめでとうございます」の唱和，拍手）。

出版の経緯

細川：ありがとうございます。このあとはどう進めましょうか？

小笠原：そうですね。まずこの会が開かれた趣旨を説明してから，祝賀会の大雑把な進め方をお伝えします。どうぞ飲んだり食べたりして，リラックスして話しかつ聞いていただければと思います。



今日は天候不順の中お集まりいただきまして誠にありがとうございます。本来なら秋口の静かな時期にゆっくりお話をうかがいたかったのですが，とんでもないことになり，嵐の合間にかろうじてお集まりいただきました。函館の猪上先生はお気の毒にとうとう到着できませんでした。というわけで，見込み違いもありましたが，ともかくご参集いただきましてありがとうございました。

この会の趣旨は，まず，長い題ですが『北大教養教育のすべて―エクセレンスの共有を目指して』という本の出版祝賀会です。二番目に旧高等教育機能開発総合センターについて回顧したいと思います。

まず本に関してですが，出版の話が出たのは 2005（平成 17）年ころです。私は 2006（平成 18）年に北大を定年退職しましたが，その前から東信堂から北大の教養教育について出版のお誘いがありました。願ってもない話だと思い，北大在職中に原稿の分量で今の本の三分の一くらいを集めたのですが，その後，思いがけず東京農工大に行くことになり，そのあと筑波大に移って，合わせて 5 年ほどむこうにおりました。その間，コンピュータ画面のフォルダーを眺めては何とかしなければと思っていました。編集が進まなかったもう一つの理由には，この本の主題に「区切り」がつかなかったこともあります。

しかし札幌にもどって，著者のお一人である吉野悦雄先生の伝言を受け取ったことが編集再開のきっかけになりました。吉野先生は北大の一般教育演習，論文指導の生みの親のような方で，はじめのこ

ろから関わっておられて，この本の執筆を呼びかけたとき真っ先に立派なレポートをお届けいただきました。札幌にもどって，吉野先生が原稿はその後どうなったか気にしておられるとうかがい，これはもう出さなければならないと覚悟を決めました。

そういう個人的なことは別にしても，北大の教養教育改革の区切りとなるのは，総合入試が導入され定着したことと，もう一つはセンターが改組され，簡単にいえば無くなって高等教育推進機構になったことです。それがこの本の主題に関する一つの結論かと思います。私の退職以降のことについては安藤先生と細川先生に企画から編集までお手を煩わせてようやく完成に至りました。また，安藤先生は全面的に校閲を担当し，徹底的なチェックをして下さいました。ということで，吉野先生，細川先生，安藤先生に対して，この場をお借りして心からお礼申し上げます。



この本が出て，もともと爆発的に売れるような種類の本ではないのですが，それなりに反響はありました。広島大学の高等教育研究開発センターの所長をしておられた有本章先生から「教養教育に関して画期的な本である」という私信をいただきました。

また，国際基督教大学の絹川正吉先生からは，北大教養部の文化は札幌農学校・農学部の文化だということがよくわかったというご感想をいただきました。絹川先生が薫陶を受けた矢内原忠雄は新渡戸稲造の弟子にあたり，その流れで絹川先生も札幌農学校には関心がおありだったとのことです。

謝辞に関連して，実は北大では大学のトップがずっと教養教育を牽引してこられたわけです。これはセンターができる前の廣重力先生，それから丹保先生，中村睦男先生，佐伯先生，今の山口佳三先生と一貫しており，言ってみれば身をはって全学教育・教養教育を牽引してこられたわけで，まずこのことを述べなければなりません。私からお礼を申し上げるのは筋違いであることは承知しておりますが，本を編集してみて総長のリーダーシップを痛切に感じました。ほかの大学の方から，どうして北大の総長・学長はあんなに教養教育に熱心なのかと聞かれることがありますが，私は単純に「それは伝統です」と答えることにしています。

それからセンターについては，すでに改組されて新しくなりましたので，回顧の機会をいつか持ちたいと思っておりました。それで生涯学習研究部の方にも呼びかけて，町井先生においでいただきました。発足時の教授であった小林甫先生もご出席の予定でしたが，身内に不幸があって参加できなくなったとご連絡がありました。残念なことです。また，元総長の中村先生は先約があり，現総長の山口先生は海外出張中で残念ながら出席できないとのことです。

今日の会の趣旨は以上のようにお祝いと回顧です。この主題について当事者，つまり，たとえばワーキンググループで案をつくった方や全学教育関係の委員会の方々，それにトップの責任者までが揃っています。このテーマについてこれほどのメンバーが揃って回顧する機会はめったにないと思いますので，形式的なお祝いよりむしろ思い出話をうかがいたいというのがこの会の趣旨です。それで，このあと 10 分か 15 分ほど食事をして，そのあと順にお話をうかがいたいと思います。お手元のプログラムの最初のページに出席者名簿がありますが，これは実はお話しいただく順番を想定しています（笑）。この順番は本の目次と，このテーマの経時変化にだいたい沿っています。というわけで，お一人あたり 5 分ぐらい話していただき，そのあと質疑応答があることもお含みいただきたいと思います。

こういうお話を聞き流すのはとてももったいないと思いまして，録音をとらせていただきます。万が一，録音から記録を起こすようなことがあれば，改めてご相談させていただきますが，そういうことは抜きにして自由にお話しいただければと思います（そのあと山崎勇夫氏提供の資料の説明，阿部氏の「北大アルバム」の説明など――省略）。

予科から教養部へ

細川：それではまず丹保先生からお願いします。

丹保：いや，もう，完全に記憶の彼方で分かりません。ただ，教養部の前に，ここに書いていないその前の話がちょっとあります。ここでは僕しか知らないと思いますが，僕は旧制中学で，途中で新制高校に切り替えられたのです。旧制の札幌一中が第一高等学校になりました。ところが学校の名前を持っていってしまった人がいて，いま札幌第一高等学校というのがあるでしょ，あれは最初の南高の校長が持っていったもので，それでいま旧制一中は南高です。それで僕の一級上の人は多くは四修で，廣重先生はたしか予科ですね。僕は実質上，新制の最初なんです。3 期生は旧制から新制に切り替えられて予科に行けなくなった学年なんです。僕の一級上は教養部長をやった柏木秀夫さんとか，中田靖泰さん，片山厚さんとか，みんな四修で飛んで行って予科に 2 年前に入って，1 期生なんです。



ですから，僕はちょうど予科と教養のつなぎ目で，僕が教養のときは予科の先生が三分の一くらい，理学部・文学部の先生が三分の一ぐらいいたでしょうか。そのときはひどいもんで，何もないんですね，いまあるようなシステムは。従って，たとえば数学では予科から来た先生から置換積分を徹底的に何十題とやらされました。夏休みの宿題は 40 題か 50 題の置換積分でした。これは大変だったですね。ところが，予科から来た秋山隆二郎先生という方は，いまでも覚えていますが, デデキントのシュニット (切断）なんですね。何のことやら全然わからないんです。いまだに分かりません。どうして試験を通ったのかも分かりません。それからドイツ語は，予科から来た先生は自然科学のためのドイツ語といったもので，グラマーが半分入ってました。文学部から来られた山岡直道先生は独文学の先生で，ゲーテのミニオンです。教養の 1 年でミニオンですからね。文法習ってませんから，ともかく辞書を何十回引いたか分かりませんが，先生の講義を聴くまでは何も分かりませんでした。いま考えれば，ミニオンは詩ですから，当然ですね。ひたすら暗記して試験を通りました。それも一つの勉強の仕方とは思いましたが，しかしシステムなどまったくない時代でした。物理でいえば僕らのクラスは，試験を通ったのは 5 人ですかね。50 人落ちました。だって，全然ベクトル習っていないのに diversion が出てくるんですよ。私の弟は 2 級下で，そのときは理学部から来た先生たちがそれに懲りて教科書を全部作り替えましたから，弟のクラスは誰も落ちていないんです。

まぁひどい時代で，この本にはたいへん良いことが書いてありますが，松浦一先生とかいろいろやって教養の概念をつくったのですが，中身はまったく無かったですね。みなさん自分たちの持ってるものはあるのですが，お互い調整していないのです。小笠原先生や阿部先生のような方はいらっしゃらなかったのです。学長はそういうことをまったくしません。廣重さんや私の時代になって，やっとそういうことをしなければと思ったのだと思います。

私は教養で徹底的にひどい目にあいましたから，こんなことでは学生がかわいそうだと思って，教養のシステムをしっかりつくらなければならないと思いました。でも，概念過剰，感情移入過剰の，ここに書いてある初期の人たちはほんとうに良かったのかどうか分かりません。特に松浦先生については，私は非常に疑問を持って見ていました。あの方の発言もやったことも私はほとんど評価しておりません。この本にはだいぶ良く書いてありますけど，そうではなく，実際にやった教養の先生方がいろいろ苦労してつくったのだと思います。概念過剰の先生方と古い予科の先生方との間の埋めきれないギャップは多分あっただろうと思います。それがようやくセンターができて，今の形になったのかと思っています。それから岡不二太郎先生というたいへん良い先生が自然科学概論をやったのですが，自然科学そのものの歴史については誰も教えていないのです。概論はあっても足下が何もないのですから，教養のシステムは足下なしの概念としてスタートしました。足下の個々の一番大切な基礎がないのです。

大学というところは大学院の基礎ではないし，大学院大学という言葉も僕は大嫌いなのですが，基礎をしっかりたたき込むということをやっていない。

そのあと 10 年ぐらいして米国に留学してアメリカの学生がどうやっているか見たら，今の大学の入学試験勉強のようなもので，ものすごいスピードで勉強して，数学でも何でも解けるようになるんです。その代わり何回も繰り返しトレーニングを受けて，基礎になるものを習っています。いまは多分そうやっているのでしょうが，僕らの時代にはなかったですね。それが非常に残念だった。今でも，もしかするとそうかも知れない。北大はそんなことはないと思いますが，本当に基礎となる勉強を大学で教えているのかと懸念します。大学教育というのは学部教育が核で，一番の基本です。大学院教育はプログラムですから，何をやっても良いのです。それこそ電車の大学院があっても良いし，バスの大学院があってもかまわないのです。ところが，大学院大学という名前を使ってそっちに力を傾注してしまうと, 教育がおろそかになります。研究も大事ですが, みなさま方に基礎をしっかりやっていただく教養からの学部教育がいちばん大事です。

ここまできたのですから，教養教育には大学教育の 4 年間全部を使っても良いのではないかと僕は思っています。それができるくらいのシステムで，大くくりで学生を入れることになったのは，ほんとうに良かったと思います。そこではやっぱり 3 年間ぐらいはしっかりやらないといけないのだと思います。旧制予科のような，基礎をたたき込むトレーニングをもう少し学部別にし直すように作り直すと，高等教育機能開発センターではなく，北海道大学の学部基礎を 3 年制で教育するような，すごいものができると思います。北海道大学の学部を作り替えることがこれからの仕事だと思います。大学院はその上に 1 年でも 2 年でも置けば良いし，大学院こそは北海道中に分散して，水産は函館，酪農は帯広，森林はどこそこというように置いてもかまわないと思いますね。そうしないと，教養教育と，学部と，大学院があるという三重の構造では，多分維持できないのではないかと外から見ています。

ちょっと，いろいろなことを言い過ぎましたが，そういうことでよろしくお願いします。

改革リーダーの役割

細川：ありがとうございました。何かご質問ありませんか？　コメントがあればどなたでも。学会みたいですね（笑）。では次に佐伯先生お願いします。

佐伯：私はちょうど 1960 年の安保騒動のときに入学したものですから，入学してから数カ月間はほとんど授業もないという状況で，九州の田舎から勉強しようと思ってきたのに最初の 3 カ月ぐらいは何もできなくてガックリきました。こんなことで良いのかと思ったのが私の大学生活の前半です。同じく教養課程も最初のイメージはあまり良くなかったのですが，年を経るに従って，いったん大学を出て役所にいて，教養とか，われわれの専門ではない科目が意外に大事になるのを感じました。そのあと大学に戻ったのですが，ほとんど教養教育に興味を持たないまま過ぎました。2 千何年だったか，法人化の前ですね, 中村先生が総長になられて, 副学長になってくれということで，徳永正晴先生のあとに教育担当になりました。

そのころは大学の入試制度の話もあり，その後には大学の学生の成績評価に GPA 制度を導入しようという動きもあって，これから新たな道を歩もうということで，丹保先生が設定された組織がきちんと動き始めていましたので，高等教育は小笠原先生を中心に，社会との繋がりの方は町井先生にということで，その方面の先生方のお知恵を借りながら，また総長の直轄で教育改革室もできたので，そこの先生方とも相談しながら，最終的には教務委員会を通したり，評議会，法人化後は教育研究評議会の了承を得たりして実施に移していきました。このように何段階も踏むためどうしても時間がかかってしまうもので，GPA にしても，その次の入試についてもみなさんにたいへんお世話になりました。

特に大くくりの入試については，理系の方はわりに早くまとまったのですが，文系の方はうまく行かないところもあってギリギリまでもめて，総長選挙も絡んで 2 年間凍結などという話もありましたが，最後は無事認めてもらえました。ですから，私の仕事は率先して改革の仕事を進めて行くというよりも，どちらかと言えば教育改革室や研究部で新たな方式が決まったらそれをいかに早く実現するかとい

うことで，それにはかなり努力したつもりです。



総長になって 2 期目は第 2 期の中期目標・計画を出す時期で，各学部の教授会を訪問してその内容を説明したのに合わせて，教育改革に係る案も説明し，各学部の教授会がウーンと言っているうちになんとなく了解したような形になりました。そのように，早く実現することには努力したつもりですが，どういうことをやったのか，そのときの記憶はあまりなく，今回この本を読んで，ああなるほどあのときはそういうことだったのかと思いました（笑）。いろいろ駆け引きもあって，大きな部局には直接相談に行って若干改訂したこともあります。大くくり入試は第二次案で実現しました。

私が国立大学協会の入試委員長をやったときには，たくさんの先生方にいろいろお世話になりました。高大接続の問題では佐々木先生が非常に頑張られて，文科省の委託を受けて全国を回って説明されたのですね。教育の問題には，割り合い前向きにとらえる大学と，最初から何も変える必要がないという大学と，かなりはっきり色分けがあります。各大学は教育に対する思い入れがかなり違っていて，各大学の学長は教育・入試に関しては慎重だったですね。中村前総長も入試担当の委員長をされて，私もその役になって，あまりやり過ぎると将来，北大は入試制度を変えられなくなるのを心配して，最後の 2 年間は別の委員会に代わりました。そういう意味で，北大は教育の面では各大学から信頼されていたのは間違いないです。そんな中で先生方がいろいろな部会で活躍され，いまの高大接続も，佐々木先生の考えから少し変わって行くかも知れませんが，その先鞭をつけたのは北大の方々だと思います。

細川：ありがとうございます。国大協の入試部会はいま山口総長が担当されています。

保護者との連携

佐伯：もう一つ私がやったことは，GPA もできたし，大くくり入試でアカデミック・サポートセンターもできたので――これは教育の問題だけではなく学生の行動にも関係しますが――，親，保護者と大学の関係をもっと密にしようということで――それには寄付のことなども関係するでしょう――，それで成績を保護者の方に送ると決めたのです。あれは今も続いてるのですか？（「続いています」の声）もう終わっているのじゃないかと思っていたのですが（笑）。大学と学生，学生の親との関係を近くすることに私立大学は一生懸命ですが，国立大学はそこまでしなくても良いという考えでしたが，これからは財政的にも厳しくなるので新しい環境づくりが必要だと思います。これは私が提案したことです。

細川：どうもありがとうございます。いま次の入試について，研究部でいろいろ検討しています。

可愛い子には旅をさせよ

佐伯：もう一つ付け加えますと，4，5 年前に国大協の会議で，T 大学の総長がチラッとうちの大学は関東出身が 7 割になってしまったと言ったときに同席のどなたかが，それはあまり言わない方が良いのではないかと言いました。そのときは何でそれが問題かと思ったのですが，K 大学も関西出身者が増えているそうで，いろいろ家庭の事情とかもあって，比較的安い費用で大学に進ませたいというところもあるようです。一方，北大の場合は道外が増えていて，ほかの大学と少し違っているようです。どういう理由でそうなるのか分析も大事でしょう。いまあちこちで大学の説明会があって，東京や名古屋，大阪に行きましたが，そのとき私の教え子が，いま親にとって子供の教育はとても難しい，そのあたりをうまく説明してもらえれば有り難いというので，早く親元から離せば子供は親の有り難みがわかりますと話しました。できるだけ早く北海道あたりに飛ばした方が良いですよ（笑），はじめ子供は文句をいうかも知れませんが，そのうち涙して感謝するはずですよと言いました。早いうちに親から離すべきだと思いますが，東京や関西あたりではなかなか離したがらないようですね。経済上の問題もありますが，お金とはちょっと違った状況もあるようです。まぁ北海道全体の教育力が下がっているというところもあるようですが。

細川：いま IR（Institutional Research：データに基づく大学研究）でいろいろ調査していますが，原因はどっちなのか，よく分かりません。

ほかの大学は平均でだいたい 7 割ぐらいが自宅から通っていますが，北大だけがその割合が低いのです。自宅から通うと通学に結構な時間がかかりますので，北大の学生の自習時間はほかの大学にくらべて倍ぐらい長くなっています。日本の平均は 4 時間くらいです（「1 日あたりですか？」の声）。1 週間あたりです（笑）。北大の学生はだいたいその倍くらいで, 8 時間程度です。アメリカの学生の平均は 13, 14 時間くらいで，そこにはリーディングリストで本を読まされる時間が入っていますので，それを割り引くと北大はそんなに悪くはありません。自習時間が長いことには，通学時間が短いことも多少影響があるようです（「だいたい 18 条界隈に住んでいますね」の声）。ただ，アルバイト時間が少ない分を勉強に使っているとも考えられます。

小笠原：IR で調べると日本の大学生の問題はアルバイト時間の長さですね。これが長いと勉強はやはりできませんね，物理的に。

細川：それには家庭の事情もあります。道内のある公立大学の先生の話では，だいたい 2 割ぐらいの学生は親から仕送りを受けていないそうです。



町井：北大の学生は，私学にくらべて，相対的に恵まれていますよ。ひとり親家庭の子弟などアルバイトをしないと大学には行けません（学費や貸し付け型の奨学金の話が 2，3 分続く――省略）。

「北大方式」の教育改革を全国に発信

細川：次に阿部先生よろしくお願いします。

阿部：話すことは山ほどあるのですが（笑），最初のあたりをちょっとお話しますと，たまたま私は医学部で教育の関係を担当することになって，ちょうど教養部が無くなって新しい学部一貫教育になるときで，お前勉強してこいと言われて，医学教育の研修会に参加しました。私立大学中心のいわゆる FD――当時 FD とは言っていませんでしたが――，1 週間缶詰になって勉強する会で，そのときが 18 回目でした。良い機会だと思って，教育のことは何も知らずに，そこに教育の基本があるのかと思って参加しました。FD に参加して，みなさんと同じで，非常に反発を覚えました。まったくアメリカ流のやり方で，用語も訳語はカタカナのままでした。こんなもの日本では使えないと思って，帰ってから日本語版に翻訳して医学部で 1992（平成 4）年の 2 学期にやってみました。ちょうどそのとき，教養部が無くなるので医学部の代表が必要になって，お前そちらの委員会に出ろと言われて，そこではじめて「教養の先生方」にお会いしたわけです。

その（一般教育等実施体制検討委員会）教育課程専門委員会（委員長新妻篤のち中村耕二）への参加は，私は新田先生より後で，先生は非常に立派な発言をされていました。たしか，教養部が無くなるのは困るということで，さすがにうまいことを言うものだと感心しました（笑）。たいへん勉強にもなりました。それで吉野先生が一般教育演習をやりたいといって各学部を回っておられたので，自分もやってみようと思って，1993（平成 5）年に寺沢浩一先生を指名し私のところの助教授と私の 3 人でこれを始めました。学生が全部自分たちで授業を進め，先生はやり方を指導するだけという，いわゆる学生参加型授業の始まりでした。並行して，医学部での FD の成果を土台に医学部のカリキュラムを全部作り替えました。そのとき，教養教育的なものをなくすわけにはいきませんが，医学部にはそういう先生がまったくいないので，教養担当の先生にお願いするしかないもので，医学部は理系だけれど人間教育がとても大事で文系的な面もあるなどと言って，教養教育のこともずいぶん考えるようになりました。

そのうち 1995（平成 7）年に新しいセンターができることになり，そこには教養の先生は誰もいなくなるのでどうするかという議論の中で，町井先生がいた教育学部の産業教育計画研究施設の専任教員を新センターに移すことになりました。ここは生涯学習に関係していて，私も放送講座の関係で多少関係していたもので, 当時の医学部長の斉藤秀哉先生に，生涯学習だけで教養教育のことを扱うのは少し違う

のではないか，もう一つ，大学の教育をきちんと考える組織と人が必要だと言ったところ，理学部長の堀浩先生などの加わった組織運営専門委員会（近藤潤一委員長）で検討して，高等教育を推進する専任教員が必要だと文科省に要求することになり，私も一度ついて行ったことがあります。それが認められて高等教育研究部の小笠原，西森敏之，細川の3人の専任教員が，おそらく丹保先生の指名で決まって，研究部長は工学部の吉田宏先生でスタートしました。



私も研究員として研究部の活動に参加しました。ほかの大学のセンターと非常に違うのは，教員がいわゆる「大学教育学者」の集まりではなかったことです。みな理系の先生ばかりで，私も理系ですので，非常に話が通じやすく，具体的に何かをやろうというときにスイスイ通じました。私は一般教育演習で学生参加型の授業を始めていたので，その発表の機会や研究費もいただきました。それで1996（平成8）年に吉田先生が図書館長になるとき，研究部長をお前やれと頼まれ，（医学研究科教授と）兼任で担当することになりました。私も専任のみなさんも教育学者ではないので，自分たち教員に必要なこと，大学に求められている教育改革の課題を具体的に解決することを目標にして，研究部長として動きだしました。小笠原先生はたいへん頭の良い人で，いろいろなアイデアを持ってくるので，僕はウンウンとうなずいて，ではこれとこれをこうやりましょうといって設計し，それで始めるという形で，たいへん良いコンビでした（笑）。

そうして，たとえば1998（平成10）年に全学FDを始め，これが全国的に注目され，招かれていくつもの大学を回りました。そのうち北大FDにNHKの記者が密着取材に来て，全国放送でこれが北大方式の教育研修会だと紹介したもので「北大方式」と呼ばれるようになりました。私は全国を回って，北大方式はFD研修会のほかにもたくさんありますと説明しました。そのほかに私は放送講座の委員を10年ぐらい務め，私がマニュアルをつくって，これも北大方式の放送講座といわれ，他大学のモデルとなりました。さらに，昔からあった北大方式の教養教育全学支援体制，それに北大方式の教養教育，学生参加型授業，教養教育のコアカリキュラムなどがあります。

コアカリキュラムは小笠原先生の発案で始めたのですが，その前に文科省から医学部と工学部にコアカリキュラムをやってみろと言ってきて，工学部担当の名古屋大学は，工学部にはいろいろな分野があってこれをコアカリキュラムにまとめることはできないといって結局やめたのです。でも，医学部の教育はだいたいまとまっていますから，その流れ中でまとめて，全国でもまとめていくことになりました。ところが小笠原先生がそれを教養教育でもやりたいと言うので，研究部で取り上げて，すでに教養教育の再編成は動いていたのですが，それをもう一度やり直すことになりました。

そこで小笠原先生を中心に研究部主催で教養教育に関する国際シンポジウムを3日間やり，特に私の発案で芸術を入れることになって，1日は「総合大学に芸術を」というシンポジウムを一般公開で行いました。このシンポジウムのお客さんで，マサチューセッツ州立大学芸術学部のジョン・ジェンキンス先生のお話が感銘深かったので，その後，客員教授として招き，音楽の模擬授業をやってもらいました。これはたいへん面白い授業で，北大オーケストラなどにも協力してもらって，クラスの中で実際に芸術の実践（音楽の演奏）をやりました。こうして芸術科目が定着していろいろ動きだしたのです。

それから，私は大学の評価委員会にズーッと関わっていて，結局10年以上，最後まで関わりました。その中で教員の教育業績評価の一環として，北大方式の学生による授業評価をつくりました。それから北大方式のAO入試もあります。こうやって数えていくと，北大方式と呼ばれるものは8つもあって，私はそれらに深く関わってきました。それらが注目されて，北大ではこうやっていますと全国に宣伝して回ったものです。もう何十もの大学へ行きました。ほとんど流行タレントみたいなもので，一週間に3カ所回ったこともあります。一つの大学に複数回行ったこともあって，3年間で合計100回以上行きました。そうやって，私は非常に面白い時期に居

あわせました。どうもありがとうございました。

丹保：教員評価をみんなにやってもらって良かったですね。

もう一つ，先生のお話に関係して，表現系の学部が北大にはないのです。日本の旧帝大系にはないのですが，九大が芸工大を入れて，阪大が大阪外語を入れたでしょう。大阪外語の得意分野はメジャーな外国語ではなくマイナーな外国語ですね。あれは強いと思いますよ。北大は僕らの時代に非常に短い期間，音楽特設と体育特設があったのですが，その頃の連中がその後ものすごく活躍しています。なぜやめてしまったのか，もったいないことをしました。いろいろ見てみて，このあいだ総長にも話したのですが，そういう関係の分野を取り込んだ方が良いと思います（以下，2 分ほど表現系の学部についての意見――省略）。北大の建築は建築工学はやりますが，建築の芸術はあまりやりませんから，ああいう分野をうまく取り込んだら北大の力になると思います。何とか北大が表現系を持ったら良いと思います。文学部ではなかなかできないでしょうからね。

総合大学における 3～4 年制の教養教育

細川：では次に新田先生よろしくお願いします。

新田：私がこの本に書いたのは，教養部解体の前にあったいろいろな委員会の一つでの活動です。つまり，大綱化のあと，学部一貫教育にすることが決まって，その後の教養教育をどうするかを検討する教育課程専門委員会に入らされたのです。誰かが私の前に断ったので私にお鉢が回ってきて，そこから私の人生が狂ってきました。ただ私はそのころ，大綱化というのは別に教養部を廃止しろということではなく，丹保先生がおっしゃったように，大規模な総合大学は 4 年間をすべて教養課程にするという方向もあり得ると思っていたので，ちょっと違和感があったのですが，そのころ私は四十になったばかりの助教授で，これはもう仕方がないと思って教養科目の再構築の仕事をしたわけです。実質的な作業時間は半年しかなくて，夜中までズーッと会議があったという記憶があります。委員長はドイツ語の新妻篤先生で，さきほど話に出た吉野さんが文系をまとめて，理系のとりまとめ役はいま総長の山口先生でした。



それからいろいろな学部を回って，新しいカリキュラムを各学部にどう取り入れてもらうか，教養教育科目はこういう形で設計しましたので，ぜひお宅のカリキュラムに取り入れて下さいというようなセールスをして歩いたわけです。いろよい返事の学部もあったのですが，ある学部では――いまでも覚えていますが――，一般教育演習は少人数教育で良いからぜひ必修にしたらどうですかと言ったら，うちの学部の教育についてよそさまから口出しされるいわれはありません（笑）という反応の学部もありました。そうやって各学部に教養教育をつくり上げていただきました。これはコアカリキュラムと言いだす前の段階で，どういう教育をやるか，模索という感じでした。

私自身は教養部の 1 年の前期は授業という授業にともかく全部出たのです。しかし後期は外国語を除いて一切出なくなりました。つまり面白くなかったのですね，教養部の講義形式の授業は。外国語はその先の専門に必要だろうと思って，それだけは出ました。そういう人間がいま高等教育推進機構長をやっているのはいかがなものかと思うのですが，ただそういう経験があるので，委員会でも，学生が面白いと思える授業をつくろうと，吉野さんと相談して論文指導のような科目の開設もやりました。

1995（平成 7）年以降は全学教育にはあまり関わらなかったのですが，それでも小笠原先生に新しい授業を開発するので何かやれと言われて（「技術倫理の授業でしたね」の声）お前の講義は面白くないとか言われながら（笑）やっていた記憶があります。

教養教育は単にアラカルト方式で良いのか？という問題が今でもありますが，今の教育の流れから見れば，いわゆる総合大学，核となるような大学ではキッチリとした教養教育をして，専門教育はスクールでというような基本方針があるべきだという考えが今もあります。

丹保：北大では学部 3 年間は全体を中心にして――もちろん分かれますけど，デパートメントで

はなくオプションで分かれるような格好で良いので――，残り 1 年で卒論を兼ねて専門をやれば学士の学位を与える，そうでなければ大学院に行きなさい，ということにすれば，大学院 2 年と合わせて 5 年でマスターになれます。そうすれば大学院の方は完全に専門教育に徹していけますから，ほかにこだわらないで――横の関係はもちろんありますが――よっぽど突っ込んだことができますね。

新田：いまの大学院教育の原型は研究者養成ですが，研究者になる数は少ないわけで，実際に社会に出ていろいろなところで働く場合，修士でも博士でも研究者ではないのですから，そういう教育はカリキュラム上きちんと区別するべきだという感じはありますが，これはいまの学部の体制では，なかなか受け入れられないとは思います。

丹保：バチェラー（学士）にもう昔ほどの価値はないのですから，それはしっかり考え直さないと。

小笠原：新田先生や山口先生が書かれた教育課程専門委員会の報告書をよく読ませていただきましたが，ほかの専門委員会との調整はあったのですか？

新田：たぶん無かったと思います（笑）。うちは下請け委員会のようなもので，ほかの，たとえば組織運営専門委員会は，学部長の先生方がいらっしゃる，もうすこし偉い委員会で，私たちの権限は上で決まったことを具体化することでしたので，調整は無かったと思います。

小笠原：でも，不思議なことに，教育のスピリットはこの委員会の報告書の方に出ていますね。

新田：そうですね。あのとき「北大の精神は何だ」というようなことを書きましたね。

佐伯：つい昨年，私の教え子の娘さんが学校に来たのです。カナダのトロント大学を卒業しましてね。彼女も最初はビジネスの方に行きたかったのですが，やはり教養課程ばかりで，工学系だけは 2 年ほど経てばパッと分かれますが，残りはズーッと 4 年間教養教育のようなものばかりだったそうです。教養ならどこにでも行けるのかと聞いたら，そうはいかないそうで，人気のある生命科学とかは，その授業をとる前にあれを取れこれを取れと言われてなかなか生命科学に行き着かない。分野で分けてはいないけれど，行きたい人はいろいろしなければならないようです。それで彼女は最終的には歴史を取らざるを得なかったそうで，では歴史にはどうやって行き着いたのと聞いたら，一番近場の「アジアの歴史」というのをズーッと取っていったそうです。8 割が中国史だったそうですが。

丹保：プリイグジット制（それぞれの科目ごとに事前履修科目を定める制度）をガッチリすると，かなり立派なプリカリキュラム（予備教育カリキュラム）ができますね。

佐伯：大学院でここに行きたいと思ったら，遅くとも 3 年の終わりか 4 年までに関係の授業をとっていなければならない，それが厳しくてということでした。北大では学科への移行が大変ですが，あっちは科目をとるときにハネられるのですね。

丹保：それが本当なのだろうな。

新田：それぞれの段階で競争があるのですね。

生涯学びつづける力を育てる

細川：それではつづいて町井先生お願いします。

町井：今日はたった一人の生涯学習計画研究部ということで，おさらいしておきますと，歴代の研究部長はまず山田定市先生，そして小林甫，小出達夫，この 3 人は教育学部出身で，そのあと徳田昌生先生，野口徹先生は工学部，そのあとが私，農学部の松井博和先生，そして最後が木村純先生でした。

生涯学習研究部は外にサービスすることばかり考えてるのじゃないかと言われた記憶もありますが，必ずしもそうではなくて，生涯学習の視点からの大学教育の調査研究を米国や韓国の大学と共同で行ってきました。特に小出部長のときは，いま東北大学で活躍している羽田貴史先生とか，阪大で中心になっている佐藤浩章先生とか，みな小出さんの教え子で，特に佐藤先生は生涯学習研究部の共同研究に参加していました。お二人ともいま他大学の高等教育センターで頑張っています。

私と小出さんと二人で科研費をとってポートランド州立大学と共同研究で大学教育を調べてみると，あの大学では当時「生涯学習者を育てる」ことを大学のモットーとして掲げ，大学教育は大学の中だけで終わるものではなくむしろその後に学ぶ基礎力を育てるものだと考えて，ユニバーシティースタディ・キャップストーンプログラムなどで学生が地

域社会や行政とも協力して取り組んでいました。その辺に注目して毎年交互に研究会を開き，センターの行事にも取り上げてもらいました。

そうは言っても，私どもの外へのサービスの負担は結構重くて，私も道民カレッジの会長を十年近く務めました。それでも教養教育に関わり，卒業生による社会で必要とされる力などの講話をもとに「大学と社会」という総合講義を立ち上げて，学生たちにも好評でした。そのほか，北大公開講座に高校生に参加してもらいそれが高大連携型の授業として高校の単位になるという取組も行いました。それらも含めて，生涯学習の視点からの我々の大学教育への貢献ももうすこしいろいろな形があってもよかったかと心残りはあります。



高大連携に関連して，私は 2017 年 3 月までの予定で北大で教職課程の授業を担当させてもらっていますが，高大連携として北大のいちばん重要な使命は優れた高校教員を育てて地域に送り出し，そこから北大で学ぶ目標をもった高校生が育ってくる，そういうことじゃないかと思うのです。昔もたとえば物理で，高校で北大出身の先生に習ってその影響で北大に入ったという例が結構多かったのです。そういう意味で教職課程の授業は北大にとって高大連携の重要な仕事にもなるのじゃないかと思います。

結局，機構への改組で生涯学習研究部は無くなってしまって心残りはあります。それでも強調しておきたいのは，教養教育は専門教育の準備課程ではなく，生涯にわたり自ら学んでいく基礎となる力を育てるものなのだということです。教養教育のそういうあり方もぜひ考えていただいきたいと思います。

新田：生涯学習研究部の縮小は，大学全体の教員数を縮小せざるを得ない中で，ほんとうに申し訳ないことですが，いまは教養教育だけでなく，大学院のほうでも「新渡戸スクール」という国際化プログラムで育てたい力としてまず挙げているのが，まさにいまお話のあった「生涯学びつづける力」です。生涯学習力を育てることは，現在，国民にとって大きな課題でして，大学としても学部教育だけでなく大学院教育の中にもそういう仕組みをつくってプログラムを走らせているところです。

町井：もう一つ現役の先生方にぜひお願いしたいことがあります。私の退職のすこし前に社会人大学院生 500 人ほどにアンケート調査を行って，文科省や社会の反響が大きかったのですが，社会人大学院生の北大に期待するニーズとプログラムが必ずしも一致しておらず，社会人大学院生が北大のよさを学びとっていない，自分が何をしたらいいかわからないという実状がわかりました。社会人学生の教育は大学と社会の関わりにとってとても重要で，社会人教育の方法の改善は，より長い視野で，大学教育のあり方にも関わる問題だと思います。社会人大学院生は，非常に忙しくて，教育の実状への失望もあって，かなり減ってきているとは思いますが，ご配慮をお願いします。

佐伯：私の考えですけど，アメリカでは，社会人が大学院でマスターやドクターの資格をとればかなり給料が上がる，学位にそれだけの魅力があるのですが，日本の場合は年功制の体系で給料はほとんど上がらない，休んだらダメで，給料が学位に見合っていないのです。それでは大学院で学ぼうという気持ちにはなかなかならないですね。一つの例ですが，世界銀行出資のある国際プロジェクトで給料を較べたら，日本の某役所の 40 代半ばの課長補佐さんがリーダーになったのですが，グループの中でいちばん給料が高いのは若いアメリカのドクターだったそうで，一般社会はともかく，研究職などでは高度なことを学んだらそれだけのことがなくてはね。

丹保：生涯教育には放送大学をもっと利用したらいいと思うのです。北大にもお世話になっていますが, お互いもう少しうまく組めればいいと思います。

僕のところ（道立総合研究機構）には研究員が 750 人いて，その三分の一，250 人はドクターをもっていて，その半分以上は社会人ドクターですから，社会人ドクターは大事だと思います。それが案外北大ではなく帯広畜産大とか室蘭工大でもらっていて, 北大でももらえるようになるといいと思います。

教務事務の電算化から初音ミクへ

細川：それでは，次は出村さんお願いします。

出村：私はこの場では唯一の元事務職員です。教養部最後の事務長から，全学教育のスタートのときは右往左往しながら廣重，丹保両総長はじめ中村耕二, 板倉智敏両先生のご指導の下スタートしました。



まずこの本を読んで感じたこと，新たに認識したことの一つは，北大の全学教育が，官制化されていない教養部であったために，教官の分属とか所属替えとかがなくて，2 年近くもっぱらカリキュラムと組織のことに集中して検討されたことは，非常によかったと思います。もう一つは，新制大学発足のときに教務課構想があったこと，そして小笠原先生が書かれている農学部の「全人教育」の伝統が北大の予科，教養部に間接的に伝わっていることです。

全学教育のスタートのちょうど 2 年前に教務事務電算化の検討がはじまり，当初は自主開発で，現在使われている学生の ID（身分証明書）で図書館の入館を可能とすることなど，電算化がすべて上手く可動できたことは自信をもって言えます。ただ，最大の失敗は，最後の教養部の学部移行事務が電算のミスで三日間遅れてしまってことです。これは学生にとっては一生を左右する問題です。幸い最後は電算を直して手作業でやって中村耕二先生の了解を得て，キチッとできましたが，失敗事例でした。

北大の全学教育の 2 年目に慶應義塾大学教務部長と教務課長のお二人が視察に来ました。当初は北大の入学者選抜制度について聞きたいという話で，入試課長と二人で対応しました。北大の全学教育に対する全学の先生方の協力体制が見事で，信じられないと述べていました。もう一つは，放送講座や公開講座など，北大は地域貢献や生涯学習に熱心だと褒められました。もちろん，そのほかのことでは慶應は北大には負けないぞという意識を感じました。

最後に蛇足ですが，当時教務課で旧教養部の電算化をやっていた伊藤博之君は，コンピュータの画像処理と音声で，のちに有名な「初音ミク」の開発者になりました。公務員試験を受けて，工学部の沖野教郎先生のところで電算の知識を身につけて頭がガラッと変わったそうです。教養部に来てからいろいろあって，君は公務員には向かないと言ったことがあります。するとその年の秋に辞表を持ってきて，実はベンチャー企業を立ち上げると言います。引き止めたのですが退職して，立ち上げたクリプトン・フューチャー・メディア㈱は軌道に乗って，いま国内外で有名になっています。

最後に，この本はそのまま次の北大 150 年史の原稿にもなると思います。以上, 思いつくままですが。

細川：初音ミクは面白そうで私も買いました。

小笠原：電算化の初期にはほかの大学でもそういう神がかりのような職員がいたようですね。

出村：最初の 2 年間くらいは他大学から視察が次々と来て, 私も名刺がすぐに無くなったものです。

北大生の芸術リテラシー

細川：ではつづいて三浦先生お願いします。

三浦：いまお話に出た伊藤先生は，私どもの情報大学でコンピュータの授業をしていただいています。

それはさておき，私は 2001（平成 13）年から北大で芸術科目の授業を担当してきた感想などをお話させていただきます。

私の専門は哲学ですが，2000（平成 12）年に小笠原先生に来年度「芸術と文学」という新科目を立ち上げるのでその委員会に入らないかと声をかけられました。当時私はあちこちの大学で非常勤講師をしていまして，1 年間委員会に出席させていただき，そもそも「芸術って何だ」「将棋やチェスだって芸術じゃないか」とか取り留めのない話からはじまって，真剣な議論が交わされたのを鮮明に覚えています。

私は音楽が好きなだけで学問的な専門家ではないのですが，札幌交響楽団や，毎年 7 月に札幌で開催される PMF（パシフィックミュージックフェスティバル）の事務局と多少関係があったもので，それらと連携してクラシック音楽を聴く授業をやってみないかと誘われて，次の年から地域連携型の芸術科目をはじめたわけです。

正直言って，自分が北大生だったころは芸術系の授業なんてありませんでしたから，突然明日から音楽の授業をやってみろと言われてたいへん戸惑いました。北大生にこういうことを教えて意味があるのだろうかと自問自答しながら授業をやってきまし

て，今年でなんと 17 年目です。



結論から申しますと，北大生はとてもセンスがあって，教える意味があるのかなんていう疑問を吹き飛ばすくらい熱心に授業を聴いてくれています。

ご存知かも知れませんが，いまの北大生は楽器をやっている子が非常に多くて，特に私の授業をとる学生は 8 割以上，たとえば 50 人のクラスで 40 人以上は，楽譜はもちろん読めますし子供のころから何か楽器をやっています。たいてい北大オーケストラ部に入っていて，私より音楽がよくわかるかも知れません。今年はとうとう，私の授業をとっていた川村拓也君という医学部 4 年生がバイオリンで PMF に出演しています。いまの北大生のもっている芸術リテラシーは，音楽に限ってもたいへん高いのです。

毎年春のガイダンスで聞くと，自分は音楽大学に行きたかったけれど，親から音大なんかに行ったら就職がないから北大に行けと言われて仕方なくきたという学生がほんとうに多いもので，趣味としてちゃんと音楽をつづけていけばいいと慰めたりしながら授業をしています。音楽学者になるといった道は今の北大にはないのですが，関心をもつ学生，最初のガイダンスに出席する学生は年々増えています。去年の後期の「札響と音楽文化」という札幌交響楽団のコンサートを聴く授業のガイダンスには 200 人くらいきて，チケットは 40 枚くらいしか無いので，いろいろ条件を厳しくして制限しても 60 人くらい残って，その数で授業をやりました。それくらい音楽に対する潜在的な需要は高いのです。

彼らには音楽とは別の専門があるのですが，音楽に対する関心は非常に高く，教養やアクセサリーというより，かなり本格的な志向の強い学生が多いです。考えてみると，どんな専門分野の仕事でも，いまは音楽と関わりのある分野がどんどん広がっています。たとえば医学なら音楽療法とか，工学部では音響工学に関心のある学生もいれば，心理学では音楽心理学をやりたい学生もいるという具合で，必ずしも音楽学者にならなくても，音楽を自分の専門分野とつなげることが可能です。経済学志望の学生が音楽と経済の関係を学ぶとか，どのようにでも考えられる時代なので，教える方もとてもやり甲斐があります。特に学生はまだ若くて感受性が瑞々しくて，どんなことを話してもちゃんと響くのです。

コンサートを聴いたあと感想を発表させると，実に細かいところまでよく聴いています。特に首都圏からきた学生で，英才教育で三歳くらいからバイオリンやピアノをやっていたという学生がものすごい数います。そして高校で受験勉強のために止めてしまったとか，音大なんか行くなと親から言われて止めたという学生がかなりいて，それをいまも引きずっている者が多いのです。彼らに聞くと，小学生のころ親に無理矢理クラシックのコンサートに連れていかれて 1 時間の交響曲を聴かされたけれど，何がいいのかさっぱりわからなかった――わかる訳がないのですが――全然面白くなかった，ところが今回聴いてみてこんなに素晴らしいのかとはじめてわかったという感想が毎年たくさん出てきます。ですから，二十歳前後になって，音楽を専門としなくても，音楽に馴染むということはとても重要で，「芸術と文学」という授業はとても重要だというのが，私の偽らざる印象です。

私事になりますが，1997（平成 9）年に博士号をいただいたときちょうど丹保先生が総長でいらっしゃって，授与式でのお話をいまだに鮮明に覚えています。丹保先生は，みなさんそれぞれ専門があるけれど隣接する分野のことに関心をもちなさいと話されたのです。私自身，隣接分野の授業をしているわけで，学生にも音楽はどんな専門分野でも結びつけられるのだと口を酸っぱくして言っています。

というわけで，毎年やってきて，とてもやり甲斐のある仕事だと感謝しております。

小笠原：三浦さんは獣医学部を卒業されたあと文学研究科で哲学を専攻された方です（一同「エーッ」）。

佐伯：お話を聞いて思ったのですが，北大に来る学生は道内でいちばん豊かなお宅のお子さんなのです。東大はもっと上で，慶應よりも上だと，慶應の元塾長の安西祐一郎さんがいつも言っていました。そういうお宅の子供さんだから小さいときから趣味で楽器をやったりしているのですね。

丹保：東大は会社役員の子が多くて，北大は学校の教師や公務員の子が多いのですね。

町井：丹保先生のころ，生協の調査で，親の年収

の平均が東大は 900 万，北大が 600 万でしたね。

佐伯：北大は七大学の中ではいちばん下でしたが，私のころは 6 番目になりました。本州から来る子が増えたためです。

新田：東大が年収 400 万以下の子には授業料を免除すると言っても，そんな学生いないのですよ。

阿部：ぼくも小さい頃から絵が好きで，絵の道も考えたのですが，絵じゃ食えないと思って医者になりました。医学でも動物学とか，絵の素養が役に立つのですね。そういう思いがズーッとあって，たまたまマンドリンを弾くようになって，そのころまだ教育学部に特設音楽科があって，その学生の演奏がとてもよかった，そういう思い出もあるもので，芸術科目が定着したのはとてもうれしいです。

佐伯：医学部出身でピアノの名手といえば上杉春雄さんがいますね。今度また医学部の新人がピアノですごい賞とったそうですね。

望月：安田和則理事が，医学部にはいつの時代も才能がいて甘く見ちゃいけないと言ってましたね。

丹保：入学式で演奏する北大オーケストラの指揮者の川越守さんは私と中学から同期で特音です。2, 3 年だけ音楽特設と体育特設があったのですね。

佐伯：特音から N 響に行った人もいましたね。

望月：札幌大学の高橋健一郎先生に北大の全学教育でお願いしているロシア音楽の授業も，先生と一緒に演奏できると，たいへんな人気だそうです。高橋先生はロシア語学が専門ですが，ピアノもすごくて全国レベル, 国際レベルの賞をとっているのです。お父さまは亡くなられた北大言語文化部長で，本人は芸大も考えたけれど東大を選んだそうです。そういう子たちは勉強もできるのですね。

阿部：ハーバード大でも，いまのお話のとおり学問も芸術もという学生がたくさんいますね。

小笠原：ポーランド共和国の初代首相は，パデレフスキという大ピアニスト・作曲家でしたね。

普通教育が生き方を決める

細川：それではつづいて佐々木先生お願いします。

佐々木：私は 1977 年 2 月 1 日に北大に赴任しまして，そのときは教養課程の学科目の担当でした。教養部教官会議にも出て教務委員もやり，その関係でいまの構内交通委員会や北十八条道路問題専門委員会でアンダーパスの案をまとめたりしました。その後，学部の講座に移ってしばらく入学者選抜制度調査委員や学生委員などの仕事をしましたが，丹保総長のときに AO 入試の問題で二度目の入学者選抜制度調査委員を仰せつかって，それ以来入試改革や高大接続問題に関わってきました。



入学者選抜の話は教養教育と深い関係があります。かつての教養教育にいろいろ批判があったのは確かですが，設置基準の大綱化により学部タテ割り入試になって以降，私がいちばん心を痛めたのは，学部・大学院に一般教育（ジェネラルエジュケーション）を欠く学生がいっぱい出てきたことです。公共政策大学院の宮脇淳先生の法科大学院との合併授業で「なんで人を殺してはいけないのか」と問うたら，法科大学院の学生が「刑法に書いてあります」と答えたもので宮脇先生は驚いていました。そういう学生の単位の取り方をみると，法学部に入って初年次から法学関係の科目ばかりとっていて，そのまま実定法の授業に入る。哲学や文学も，法学以外の社会科学も，自然科学も，どこでも学んでない。そうするとそんな学生が出てくるのですね。

そこで思い出すのは，アルフレッド・マーシャル（1842–1924）というイギリスの経済学に足跡を残した人の『経済学原理』の中にある言葉で，「学校で習う専門というのはどうせ賞味期限のあるもので，大切なのは普通教育だ。それが学校を出てから新しい問題にぶつかったときにどう生きるかを決定する」という趣旨のことを言っています。

そんなわけで，北大で一般教育が今日までみなさんの努力でつづいてきたことに，私は心から感謝したいと思います。「北大方式」がつづいたおかげでしょうが，学部タテ割りになってからも，スタート時点で小笠原先生，阿部先生，新田先生，吉野先生，山口先生など，いろいろな方々が努力されたおかげで，学部の勝手でカリキュラムをつくらせないことを徹底して，そのあとも安藤先生がかなりの腕力を

使って，学部が勝手に切り分けたいというところをことごとくはね除けてつくってこられたことはものすごく大きかったと思います。だから北大には普通教育，一般教育を育てていく芽がある，これを大事にしてさらに豊かにしていってほしいと思います。

私が入学者選抜制度の改革を考えたのもそれと関係していて，ズーッと入試のことを考えていると，高大接続が上手くいっていないわけです。理由はいろいろありますが，そこでいちばん大切なのは，子供たちにはどの科目が得意だ・不得意だということはあるでしょうが，高校まではともかく普通教育をちゃんと受けて，それを前提に大学に入ってくるようにしないと，まともな大学生にはならない。そういうシステムがいまの日本ではほとんど壊れてしまっている。それが中村総長に言われて国大協第二常置委員会の専門委員の仕事をはじめたときに思ったことです。そのとき閃いたのが「底の抜ける高校教育，痩せ衰える高等教育」というキャッチフレーズで，このままではほんとうに大変だと思います。

そんなことで今日までやってきたのですが，そのプロセスで大くくり入試は絶対必要だと考えて，佐伯先生にかなりバックアップ，サポートしていただいて報告書を出しましたが，実施まで 5 年以上かかりましたね。そのとき驚いたのは，理系の先生たちは「総合教育部」にすぐ乗ってくれたのに，文学部と法学部がダメだと言ったことです。文系こそは諸学に通じていなきゃいかんのだろうにと思うのですが，そうならない。経済と教育が 8 割出すと言うので文学部と法学部は 2 割り出してくれと言ったらそれも嫌だという。それに執行部の中の文系出身の人も反対するのでそのときは実現しませんでした。自分の学部のことしか視野になくて，学生のことを本当に考えてはいないのです。それで私は北大ではもう学部は無くしたほうがいいと思いましたね。

新田：そのとおり，コース別の教育プログラムだけでいい，学部・学科という屋根は要らないのです。

佐々木：各学部がカリキュラムと学生を囲い込んでしまうのはもう要らないですね。考えてみれば，工学部では学科や専攻を越えてπ型授業とか，T 型授業を実施しています。それを全学でやったらいいと思いました。かく言うほど私は，普通教育をなんとかしなきゃいけないと今でも思っています。みなさんの支えがあってこれまでいろいろなことをやってきましたが，まだまだ課題はつづくのでしょうね。

最後に私のモットーを一つだけ申し上げておきます。これは自分で勝手につくったものですが「真理は曲がって必ず貫徹する」と，こう楽観的に考えて，みなさんとともに歩んで参りたいと思います。

小笠原：国立大学法人でほかにも総合入試をやりたいという大学がありますね。

佐々木：まぁ，やってもダメでしょうね。

新田：あそこの教育担当副学長は知り合いですが，本気だと言ってますよ。

佐々木：いくら本気でも，北大と東大以外は，学部の枠が強すぎて，それがガンですね。

新田：たしかに北大では，教養部が無くなったあとも旧高等教育センターにその DNA が残っていたので，20 年のブランクがあってもできたのですね。

佐々木：いま私は大学評価の仕事もしていますが，入試でも，評価でも，学部の壁を越えて全学で力を合わせるのがいかに難しいか，よくわかりますね。

先進的な情報教育と TA 制度

細川：次は栗原先生よろしくお願いします。

栗原：この本への私の貢献はほんのわずかなものでして，2 年間だけ教育改革室に参加したときの仕事です。教養教育は複雑な多面体のようなものでしょうが，私の接点は情報教育という一点だけです。



当時，高校の普通教育で情報処理教育がはじまり，それに対応して北大の情報教育も新しくしなければならないということで，教育改革室の WG で取り上げられたわけです。最初は簡単な仕事かと思ったのですが，やってみると関連してさまざまな難問が出てきて思ったより大変でした。言いたいことは山ほどあるのですが…（笑）

まず一つは，私なんか工学部でコンピュータを研究しているばかりで，教育について深く考えたことはなかったのですが，教育改革室ではみなさんそれぞれひと言お考えがあって，あるとき小笠原先生が

おっしゃったことを今でもよく覚えています――教育の基礎はまず学生の名前を覚えることだと。それで自分でも努力してみましたが，定年間際になってもなかなか実現できませんね。さらに思い起こせば30数年前，まだ助手になって数年のころ，お昼どきに工学部の北のほうを歩いていたらむこうから当時工学部長の丹保先生が歩いてみえて，いきなり「栗原くん」と声をかけられたのです。話の内容は忘れましたが，工学部の教員は400人近くいるのに学部長が何で私の名前を知っているのかと驚きました。そんなわけで，学生や部下の名前を覚えることを重視される丹保先生と小笠原先生がこの場にいらっしゃるのには何か必然性を感じます。

北大の情報教育の新しいカリキュラムをつくるにあたって，私一人で決めるわけにもいかないので，センターに情報教育研究会をつくってもらって，工学部から私や情報教育の責任者など3人ほど，あと大部分は他学部の先生たちで，文系の方もおられて，それぞれコンピュータについては一家言おもちの先生方ばかりで，議論がはじまるとまったくまとまらない。小笠原先生も困っておられました。総合大学でみなさんの考えをまとめるのがいかに大変か，そのとき初めて実感しました。

ちっともまとまらないので，こうしたらどうかとすこし強めの意見を言ったら，小笠原先生がそれはいいから文章にまとめてくれとおっしゃって，なんとか文章にして各委員に回したら，当日欠席の文系の委員から，何でこんなものをまとめるのだ，栗原にそんな権限はないというお叱りで大騒ぎになって，最後は小笠原先生に巧くまとめていただきました。

それで終わりかと思ったら，カリキュラムをまとめただけではダメで，実施体制までまとめてほしいと言われて，当時，国立大学の法人化に伴って非常勤講師を大幅に減らさなければならないという問題があって，情報教育は語学と並んで非常勤講師が多いもので，それを半減して，100人以上いたのを50人くらいに削減してくれと言われて，クビにするのは簡単ですけど，その代わりが問題で，非常勤講師が減った分を誰が教えるのかということで，ではTAを使おうということになりました。ところが，それまでTAの仕事は教室のライトを点けたり紙を配ったりするだけだったのに，今度は先生の代わりをして時給千円少々ではTAが集まるのかという心配もあって，また教育の質の維持の問題もありますから，TA研修をどうするかという話になって，そしたら小笠原先生が思いついたように，それなら「TAの単位化」をすればいいじゃないかとおっしゃって，でも具体的にどうすればいいのかわからなくて，最初はひどく無責任な話だと思いました。

それでも検討を進めていくと，成績評価の厳格化の流れもありましたし，TAに給与を与えて同時に単位も与えるって変じゃないかとか，単位化されたTA研修の授業にはTAに採用されなかった学生は参加できないのかとか，いろいろ指摘されて大変でした。当時私はまだペーペーで，北大という大きな総合大学で制度を動かすってのがどういうことか，まったく先が見えない感じでした。

ところが，いま隣にいる安藤先生が，じゃぁそれをA4判1，2枚にまとめてみてくださいと言うので，ともかく1.3枚ほどにまとめて渡しておいたら，私の知らないうちにそれが北大の制度になっていました。そのときは安藤先生の力かと思いましたが，もちろん佐伯室長のお力も大きくて，ともかく教育改革室ってすごい！と思いました。

制度ができても，情報科学研究科でそれを実施するにはまたいろいろ苦労がありましたが，そのうち道が拓けました。そしてその記録がこの本に載ったので，苦労した甲斐はあったのかなと思っています。

小笠原：北大の情報教育とTA制度は，全国でも飛び抜けたものですよ。

学生の学習意欲と職員の意識改革

細川：では次は望月先生お願いします。

望月：この本で私が書いたのは北図書館のことですが，その前に大くくり入試の問題で，文系のとりまとめの係は私でした。100人という数は確かに多くはないのですが，ともかくそれでまとめました。ただそのときは，佐々木先生がおっしゃったような反対意見はもうみな言い尽くしていて，もうみんな諦めていたので，その数はそれほど難しくなくまとまりました。それを全学に報告しても，まぁいいでしょうと言うだけで，もうちょっと頑張ってこいとは言われませんでした。

北図書館については，ご承知のとおり，大くくり入試とともに，あるいはそれ以前の 2008（平成 20）年ころから入館者数が本館を抜いて，それ以来ズーッと上回っています。先ほどから話が出ているように，道外，自宅外の人が多いとか，あるいは履修登録単位数の上限を設けたとか，いろいろな背景がありますが，やはり最近の北大生は勉強するようになったなぁと思います。成績が「オール秀」という人が――医学部移行を目指す人でしょうか――5



人くらいは必ずいますから。そんなに頑張ってどうするのと心配になるような人もいますが，そういう例外的な人は別にしても，全体に底上げされたということは，北館での勉強時間をみていると感じます。ビデオを見にくるだけではなく――ビデオもいいのですが――平日の試験時期以外でも満席で机が無いということが起こって，西館が去年できましたが，それももう満杯で，試験時期には学外者はお断りにしています。

私は今年で定年ですが，北館の仕事がいちばん長くて 6 年やって，事務の方たちの中に自分たちも役立ちたい，大くくり入試になって全学教育がこんなに変わったことに自分たちも関わりたいという気持ちが強いことがよくわかりましたので，できるだけ協力してもらってきました。その間に SD（staff development：職員研修）もはじまり，各部署が協力して取り組むよう推奨されるようになって，そういう職員の気持ちを知ることができたことが図書館に関わっていちばんよかったと思っています。学生の学習意欲と職員の意識改革，これが北館の 6 年間で得た私の宝ものです。

小笠原：すばらしい成果ですね。

佐伯：授業中に廊下をウロウロしてる学生を見かけなくなりましたものね。

丹保：ずいぶん進歩したものだね。

佐々木：ぼくは文系がもっと総合入試枠を拡大すればいいと思うのですが，現状では文系が北大をローカルな存在にしている極ですね。

新田：文学部だけはかろうじて道外生がすこし多いですが，ほかはもう完全に「北海道学部」ですね。

時間をかけて多面的に改革を継続

細川：それでは私と安藤先生が残っていますので，できるだけ短く終わらせます。

私も言いたいことはいろいろあるのですが…(笑)

吉田先生，阿部先生，小笠原先生，安藤先生のあと研究部長を継いで，IR 関係，FD 関係，教育全般など，いろいろな講演を頼まれるのですが，他大学はなかなかうまくいっていないようですね。

京大の前の総長の松本紘先生がお見えになって教養を見ていかれたのですが，よくわかった，時間をかけなきゃダメなのですね，とおっしゃっていました（笑）。IR の関係で大阪府立大の担当の先生とも話したのですが，うまくいかない，学生の自習時間が伸びないそうです。

北大とほかの大学が違うのはなぜか，分析してみると理由は一つ二つじゃない。北大はいままでいろいろな制度を時間をかけてつくってきて，それで上手くいってるのですね。どれか一つ，たとえば CAP 制（履修登録単位数の上限設定）だけを取り入れてみても，それだけでは自習時間は伸びないのです。結局，ここにいるみなさんが時間をかけて育ててくださったさまざまな教育制度改革の一つ一つがうまく組み合わさって上手くいっている。FD だけではないし，IR の評価方法がいいだけでもない。そうした仕組みの全体が，北大はほかの大学よりうまくできているからで，その恩恵をうけて今後もなんとか発展させていきたいと思っています。

総合入試にしても，それだけ取り入れればいいかというと，そうはいかない。ソウル大学と毎年合同研究会をしていますが，ソウル大学でも総合入試を取り入れたのですけれど，話を聞いてみると細かい仕組みをチャンとやってない，それで結局，学生が人気の学部に集中して，不人気の学部には行かない（「昔の北大と同じだね」の声），それで止めたそうです。北大では，これまで教育改革に取り組んできた方たちがかなり細かいところまで気をくばって制度改革を進めてきたのが大きいですね。

芸術科目とオルガン，そして北大の未来

細川：最後に安藤先生に短いひと言と締めのご挨拶をお願いします。

安藤：私は 1990（平成 2）年に北大に赴任したとき，この本に書かれているような北大の教養教育の伝統については何ひとつ知りませんでした。ただ，教養・専門・大学院・助手と東大駒場，そのあと山形大学教養部と，比較的教養教育に熱心なところを歩んできたので，北大で全学教育の改革に関わったのは運命かなという気はします。



ここでは一つだけ，芸術科目についてお話します。北大にきて最初の全学的な仕事は学生委員で，そのあと全学教育委員として「平成 13 年度コアカリキュラム」導入に関わりました。そのとき「芸術と文学」という新科目はできたけれど，実際の授業，特に音楽の授業は学内に人材がいないため（地域連携型の芸術科目とは別に）非常勤講師として東京芸大の伊藤隆道先生（デザイン）と渡辺健二先生（ピアノ），そのほか三浦先生（ショパン），藤原一弘先生（オルガン）などに開講をお願いしました。

伊藤先生は札幌出身で暮れの風物詩「ホワイトイルミネーション」をつくった方で，そのツテでピアノの渡辺先生にも引き受けていただき，以来 17 年間お世話になりました。お二人とも北大での授業をたいへん楽しみにして，さすが北大生だ，芸大生にも常々これからは演奏家，制作家も言葉を持たなければダメだと言っているけれど，北大生のレポートはやはり大したものですねと言っておられました。

渡辺先生はそれから間もなく宮田亮平学長の下で，宮田氏の文化庁長官就任まで十年近く東京芸大の副学長を務められました。渡辺先生にはたいへん親しくしていただき盛り上がって，北大と東京芸大の間で協定を結び，北キャンパスの隅にアトリエを建てて東京芸大の先生たちに夏だけ涼しい北海道で過ごしてもらい，ついでに集中講義をしていただいてはどうかという話になりました。その話に，佐伯総長の下で教育担当副学長を務められた脇田稔先生が関心を示され，渡辺先生に頼んでむこうの学長先生や関係の委員会に話してもらったこともあります。もちろんまともに相手にはされませんでしたが。

その後，北海道教育大岩見沢の芸術関係の先生たちに北大の北キャンパスに移ってもらってはどうかと吹聴して回ったこともありますが，もちろん夢幻に終わりました。

夢物語はともかく，北大にも芸術関係の拠点ができればいいなと思います。

丹保：ぜひ芸術系を，音楽に限らないけど，表現系がほしいね。演劇でも何でもね。

安藤：それからもう一つ，クラーク会館のパイプオルガンのことですが，あのオルガンは杉野目晴貞学長の主導で 1960 年代に導入され，その後忘れられかけていたものを，1980 年代に丹保先生が学生部長のころから大学主催のコンサートをはじめ，数百万円かけてオーバーホールをし，学内公認団体としてオルガン研究会をつくるよう指導して活用をはかってきたと聞きます。理工系にはオルガンに興味のある先生が多いのですね。平成 13 年度コアカリの中でこのオルガンを利用した集中講義を企画したのもそうした活用策の一つでした。

ところが私が退職したあと大学主催のオルガンコンサートが止めになったと聞き，ある機会に佐伯先生にうかがうと，コンサートの聴衆があまりに少ないのでいちど見直すように言っただけとわかりました。学生支援課で細々と企画して対象を学内の教職員学生に限りロクな宣伝もしなければ客が入らないのは当然で見直しは仕方ないのかも知れません。

このオルガンの調律を担当している松崎譲二さんに聞くと，オルガンは数百年生きつづける楽器だが，ヨーロッパでも戦火で失われたり経済的事情で破棄されたりした例は多く，特に五十年目ころは維持の負担に堪え兼ねることも多い，でもこれが一世紀を超えればもう立派な重要文化財で誰も破棄しようとは言いだせません，それまでの辛抱でしょうねとのことでした。北大のオルガンが末長く愛され活用されることを願ってやみません。

締めの挨拶をとのことですが，以前何かの機会に丹保先生に 50 年後，100 年後の北大を考えなさい，そのとき札幌の人口はおそらく 100 万を切っている

のだからと言われたのを思い出します。オルガンとともに北大も数百年生きつづけ，その歴史の 1 ページにこのささやかな本が記憶されることを願っています。みなさまご協力ありがとうございました。

細川：以上で祝賀会・懇親会を終ります。本日はどうもありがとうございました。